

2 ブリッジ拡大模型を活用したポンティック適応部位と機能性に関する理解度調査

高橋圭太, 五十嵐雅子

明倫短期大学 歯科技工士学科

keywords : ポンティック基底面形態, 拡大模型, 適応部位, 機能性

はじめに

ポンティック基底面形態は、歯科技工士国家試験の出題率が比較的高いため、学生の理解度を十分高める必要がある。しかし、歯冠修復実習において、全てのポンティック形態を製作する時間は確保できないのが現状である。昨年度は学生の理解度を説明文、図、見本模型、拡大模型を使いアンケート方式で調査を行った。その結果、教材別にみた基底面形態の理解度は拡大模型が最も高く、理解度の向上に繋がると考えた。今回はその拡大模型を使用して、各ポンティック基底面形態の適応部位と機能性について筆記試験を実施し、学生の理解度を深めることができたか調査したので報告した。

対象および方法

対 象：歯科技工士学科2年生32名

調査時期：平成29年11月7日～11月14日

方 法：学生32名を対象に各種ポンティック（リッジラップ型、偏側型、離底型、船底型、鞍状型）を以下の各項目について、学生の理解度を筆記試験で調査した。

1) 適応部位

2) 機能性

- | | |
|---------|---------|
| (1) 自浄性 | (2) 清掃性 |
| (3) 舌感 | (4) 審美性 |

条件として、リッジラップ型、偏側型、離底型、船底型は固定性ブリッジ、鞍状型は可撤性ブリッジに用いられる場合とした。

筆記試験は二回実施し、一回目は拡大模型を観察せずにいきなり、二回目は拡大模型を観察しながら解答した。
・拡大模型：ポンティック（常温重合レジン製）の
みが可撤できる下顎臼歯部（台を含む高さ約60mm 長さ約130mm 幅約60mm）

結果および考察

一回目の筆記試験で、適応部位と機能性の全項目の解答を集計した結果、理解度が最も低かったポンティック基底面形態は、鞍状型であった。鞍状型は、実習で経験していない可撤性ブリッジの場合としたため、イメージしにくかったと考えられる。最も理解度が高かったポンティック基底面形態は離底型で、全項目の理解度は95%以上となった。

項目別にみた理解度では、最も理解度が低かった項目は船底型の「適応部位」で、下顎前歯部に適応すると理解していた学生は、全体の12.5%しかおらず、下顎前歯が下唇から外観に触れる範囲をイメージしにくいと思われる。また、次に理解度が低かった項目は、偏側型と鞍状型の「清掃性」で、どちらも正答率は40%を下回る結果となった。5種のポンティック基底面形態において、全項目のうち最も理解度が高かったのは「審美性」であった。口腔内での頬側の歯冠形態がイメージしやすく、理解度が高いと思われる。

二回目の筆記試験では、各ポンティック基底面形態において「適応部位」「自浄性」「審美性」に関しては、理解度向上の傾向がみられたが、偏側型は「清掃性」「舌感」の理解度の向上はほとんどみられなかった。また、リッジラップ型に関しては「清掃性」「舌感」の理解度が低下した。原因としては、ポンティック基底面と粘膜面との空隙量と、ポンティック舌側面と舌の接触の程度がイメージしにくいことが、理解度の低下に影響していると思われる。今後は、機能性に関する説明文を加え、拡大模型と説明文を併用した実習指導を行えば、さらに学生の理解度向上に繋がると考える。

謝 辞

本研究は、学長裁量経費により遂行されましたことを付記し、感謝申し上げます。